

「FD 活動は文化運動である」

飯吉透氏（カーネギー財団
上級研究員）

講演会で強調

3月5日、大学のリサーチセンター2階大会議室にて、カーネギー財団上級研究員・知識メディア研究所共同ディレクター飯吉透氏による講演会「大学教育システムの改善とFD支援」が開催された。



講演する飯吉透氏

1905年に設立されたカーネギー財団では、アメリカの高等教育ならびに中等・初等教育の進展と改善のための研究や政策立案をおこなっており、財団はいわば全米の教育に関するシンクタンク的な役割を担っている。その主たる使命である「教育の進展と改善(Advancement of Teaching)」を遂行するために、財団ではいくつかのプログラムが実施されている。その中の一つK-12プログラムについての詳しい説明があった。これは「個々のクラスが密室状態にあるために、教員が革新的で効果的な教育実践を実施しても、その経験を他の同僚と共有することができない」という状況を打開し、「教育実践をオープンなものにし

て批判や評価を相互に与えあい、他の教員の教育実践にとっての有益なヒントとする」ことを目指すものである。

大学では同様の趣旨に基づいたFDフォーラム「私の授業作り」を開催することが決まっていたので、まさに時宜を得た講演会であった。飯吉氏は「FD活動をどのように推進させるのか」ということを中心に「ネットワークが大学を変える」「優れた教育実践とはどのようなものであるのか」について、実に有益なお話をされた。FD活動を推進するためには先ず「学生の学び」に焦点を当てた議論を活発化させることを最優先にしなければならない、そして議論の活性化のためには学部の壁を越えた教員間の「信用ネットワーク」を構築し、各教員が学部の枠にとらわれることなく思い切った試みを実施できるようにすることが重要な条件となると指摘された。そしてFD活動が目指すべき「優れた教育実践」とは学生と教師間の接触を促進し、学生同士の協力も促進し、さらに学生の積極的な学習を促進するものであるとも指摘された。また優れた教育実践をおこなっている教員や積極的にFD活動に取り組んでいる教員に対しては、ご自身のアメリカでの経験に基づいて、適正な範囲内の表彰・報奨なども必要であるとのお考えを披露された。

何より肝要なのはFD活動がめざすものは単なるテクニックの集積なのではなく、全構成員が常に授業改善や教員の資質向上を目指すカルチャーの構築であるということを強調されていた。今後ますますFD活動を積極的に推進しようとしている本学にとってまことに示唆に富む講演であった。

(大学教育研究センター副センター長

助教授 三浦真琴)